第27回中学生広場

私の思い2024

守山大会の記録

令和6年7月13日開催

はじめに

第27回中学生広場「私の思い2024」守山大会が、令和６年７月13日（土）守山市民ホールで開催されました。大会運営に携わっていただいた中学生実行委員をはじめ、開催にあたりご支援ご協力をいただいた皆さまに厚く御礼申し上げます。

この大会は、中学生が自分の夢や希望、学校や家庭・社会に対してどのような思いや願いを持っているのかなどを発表するものです。発表される中学生の純粋な考えや思いを、家庭や教育関係者、地域の大人がしっかりと受け止めて、中学生への理解を深め、健全な成長を支える機会になるように取り組んでいます。

今年度は市内の中学校６校より、およそ3,654名の生徒が自分の思いや考えを文章につづり、学級や学校、またこの大会において、将来の夢や希望、社会への提言など語り、聞き合うことによってお互いの思いの理解を深められる発表となりました。

意見発表では、各学校の学年代表者計18名から自分の生き方や夢、命の大切さ、経験による考え、弱者の立場に立ってなど、現代の社会に目を向けている中学生の率直な思いを聞かせていただき、とても頼もしく感じたと同時に、考えさせられる機会となりました。

活動発表においては、市立守山中学校の「jump ～市立守山中学校生徒会活動報告～」や県立守山中学校・高等学校の高校の部から「守山中学校・高等学校　私たちのwonderful school life」についてのプレゼンテーションをしていただきました。

この記録集は、18名の意見発表文と中学生実行委員たちの取り組みや当日の活動内容などをまとめたものです。一人でも多くの方にお読みいただき、中学生に対する理解を深めていただくとともに、熱い思いを受け取っていただければと思います。

運営にあたっては中学生実行委員の皆さんに力を合わせて取り組んでいただきました。

当市民会議では、これからも「地域の子どもは、地域で育てる」を合言葉に青少年が心身ともに健やかに育っていける社会環境づくりを図ってまいります。今後とも市民の皆さまのご支援をよろしくお願いいたします。

最後になりましたが、本大会の開催にあたりご協力いただきました市内各中学校・高等学校の皆さん、ご指導いただきました先生方、物心両面で支えていただきました近江守山ライオンズクラブ様、守山市ＰＴＡ連絡協議会の皆さまに厚くお礼申し上げます。

令和６年12月

守山市青少年育成市民会議

会　長　　**中　川　郁　男**

もくじ

「私の思い2024」大会風景 …… 1

作文募集要項 …… 3

審査員・審査基準 …… 4

意見発表 …… 5

【中学校名】　【学年】【名　前】　（発表順に掲載）

市立守山中学校　２年　佐々木 理愛　好きなことを大切にする …… 6

立命館守山中学校　２年　片本　真佳　課題って必要ですか？ …… 7

県立守山中学校　２年　林　淑乃　いま、命があるということ …… 8

明富中学校　２年　西村　駿佑　変わりゆく農業 …… 9

守山北中学校　２年　村田　一華　誰もが生きやすい社会を目指して …… 10

守山南中学校　２年　斉戸　悠真　今のバリアフリーの現状 …… 11

市立守山中学校　１年　上田　恵衣　人は助け合う存在 …… 12

立命館守山中学校　１年　片山　りさ　本が魅せる世界 …… 13

県立守山中学校　１年　増谷 壮大良　「知る」ことから始める …… 14

明富中学校　１年　石出　渉真　命の価値 …… 15

守山北中学校　１年　森田　景音　平和のためにできること …… 16

守山南中学校　１年　中島　南実　当たり前を幸せに …… 17

市立守山中学校　３年　横田 悠一郎　教訓 …… 18

立命館守山中学校　３年　山中　萌衣　「限られた時間」は濃い時間 …… 19

県立守山中学校　３年　江川　結愛　言葉が持つ力 …… 20

明富中学校　３年　青木　鈴奈　日本の上下関係のあり方について …… 21

守山北中学校　３年　村田　澪音　核心を追う人 …… 22

守山南中学校　３年　栗田　莉花　平和をつくる仕事 …… 23

講　評 …… 24

アンケート結果 …… 26

中学生広場実行委員 …… 28

実行委員感想 …… 29

大会風景

受付風景

開会式

意見発表

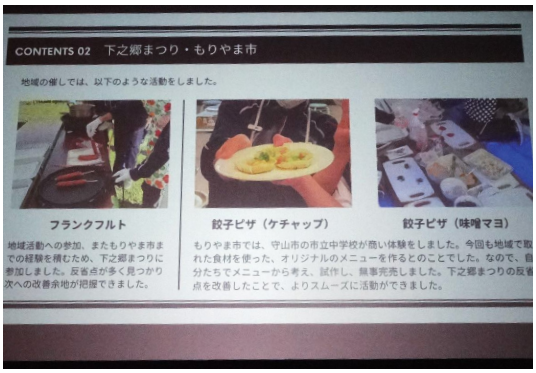
大会風景

中学生審査発表・表彰

教育長講評　　表　彰

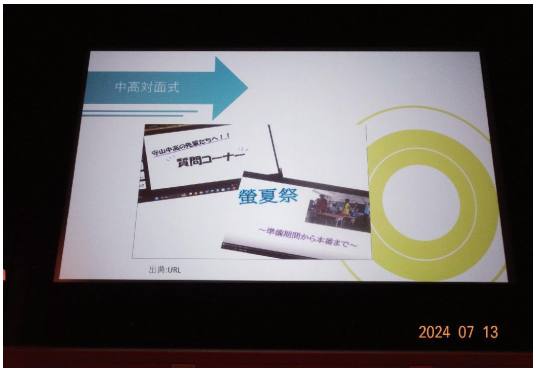
市立守山中学校活動発表

「jump　～市立守山中学校生徒会活動報告～」



県立守山中学校・高等学校 高校の部　活動発表

「守山中学校・高等学校　私たちの wonderful school life」



第 27 回中学生広場「私の思い 2024」守山大会　作文募集要項

1　趣　　旨　　中学生広場「私の思い2024」守山大会は、人格を形成するうえで重要な時期にある中学生が、日常生活や体験を通して感じていること、考えていること、将来の夢などを広く社会に訴えることにより、青少年自身が社会の一員として自覚するとともに、青少年の思いや意見を共有し、青少年の育成に対する一般の理解を深め、協力を求める契機とします。

　また、大きな夢を語ることの少なくなった現代社会において、未来を築く青少年が自らその役割と責任を自覚し、地域とのふれあいや人間の生き方を見つめるとともに、日常感じていることを主張、発表するための作文を募集します。

2　主　　催　守山市青少年育成市民会議・近江守山ライオンズクラブ・守山市ＰＴＡ連絡協議会

3　後　　援　守山市・守山市教育委員会

4　協　　力　守山市小中学校教育研究会

5　応募資格　守山市内中学校に在学する中学生

6　主　　題　日頃考えていることや感じていることをまとめたもの。
〇家庭、学校生活、社会および身の回りや友だちとのかかわりなど
〇社会や世界に向けての意見、未来への希望や提言など

7　応募方法　(1) 応募作文は、自作、未発表のもの。特別の事情のない限り自筆。
(2) 作文は 400字詰め原稿用紙（Ａ４、縦書き）４枚以内
　１行目「題名」２行目「学校名」「学年」３行目「名前（ふりがな）」を明記する。
(3) 原稿は、ＨＢまたはＢの鉛筆で濃く書くこと。(審査のときにコピーをとります。)

8　募集締切　(1) 意見発表者名簿提出　　令和６年６月14日（金）
(2) 発表者作文原稿提出　　令和６年６月20日（木）必着厳守

9　作文の送付先
〒524-8585　　守山市吉身二丁目５－22
守山市青少年育成市民会議事務局（守山市教育委員会事務局社会教育・文化振興課内）

10　審査および入賞
　各中学校から推薦された18名（市立中学校４校・県立守山中学校・立命館守山中学校各３名）が、７月13日（土）「私の思い2024」守山大会において意見発表を行い、青少年育成市民会議から委嘱された審査員が審査し、優秀賞、優良賞を決定します。
　審査基準は、別紙のとおりです。
　入賞者には賞状および記念品を贈ります。
　なお、本大会は、「私の思い2024」県広場（令和６年８月24日（土）大津市和邇文化センター開催予定）に本市代表として各学校代表候補作品（18作品）の中より２点を推薦するため、選考もかねています。

11　その他　・大会の発表時間は一人５分以内とする（厳守）
・応募作品は、返却しません。また、作品の出版権は主催者に属し、広報および青少年育成啓発資料として活用する場合があります。

審 査 員（順不同）

審査員長	辻本　長一	守山市教育委員会教育長
審査員	竹中　弘	近江守山ライオンズクラブ副会長
審査員	松本　麻希	守山市 PTA 連絡協議会代表
審査員	里内　緑	守山市教育委員会教育委員
審査員	藤村　厚	元市内中学校長
審査員	中川　郁男	守山市青少年育成市民会議会長
審査員	藤澤　三千代	守山市青少年育成市民会議理事

審査基準

1　内　　容

・中学生らしい新鮮な発表であるか。

・自らの意見、希望など、主旨がはっきりしているか。

・発表の内容が個人の体験にとどまらず、一般性、社会性があるか。

・論旨が一貫しているか。

2　説 得 力

・発表の内容が共感と感動を与えるか。

・主張が論理的に構成され、わかりやすいか。

・体験や経験で学んだことを、自分の生活に活かそうとしているか。

3　発表態度

・自分の主張を多くの人に伝える工夫をしているか。

・聴衆をよく見て、落ちついて話しているか。

4　声　　量

・声、言葉は、明瞭で聞きやすいか。

・話しぶりに、熱意と迫力があるか。

私の思い2024

とどけよう、
私たちの思いを！

意見発表

『好きなことを大切にする』

市立守山中学校　２年

佐々木　理愛

皆さんは、「勉強が役に立った」と思ったことはありますか。私は記憶の限り思ったことはないです。しかし「勉強は将来、役に立つから」と聞くことは多く、それを信じて、少しでもいい成績を取ろうと勉強します。そうすると、やりたいことや好きなことに費やす時間が減り、反比例するように勉強する時間が増えていきます。「なんでこんなに頑張らないといけないの？」と何度も思いました。そんな時、出会った一冊の本をきっかけに私は、皆さんに自分の好きなことを大切にしてほしいと思っています。

中学校に進学すると、授業の雰囲気、成績の良し悪し、それに対する周りの反応など、小学校とは違う環境へガラリと変化しました。私もこの環境に感化されてか、いい成績を取ることを重視して勉強していました。しかし、渡されるプリントや問題集に嫌気が差し、思い悩みました。この勉強に重ねてきた努力が報われるのか、意味があるのか。そう考えていたときに、孫泰蔵さんが書かれた「冒険の書AI時代のアンラーニング」と出会いました。この本は、教育や学校のルーツを辿って、なぜ勉強がつまらないのか、なぜ学校に行く必要があるのか、など今の社会の「当たり前」を問い、考え、より良い社会をつくっていこうという一冊です。私がこの本を読んで、一番衝撃を受けた、「どうして好きなことだけして生きていけないのか？」という問いがあります。私は、好きなことだけでは、社会人として生きるのが大変になるから、好きなことだけで生きることができないのは、仕方がないと思っていたし、疑問にすら思ったこともありませんでした。しかし、孫泰蔵さんは、この社会で生きる私達の中にある、「能力を高めないと役に立つ人間になれない」「能力を高めれば、幸せになれる」という考えを「能力信仰」と呼びました。そして能力は実態のない概念であり、あくまでも結果論で、相対評価でしかないのだから、能力を高めて「役に立つ」人間になるより、ただひたすらに好きなことだけして生きていくべきだと結論付けられました。私は、とても驚きました。今までの私も「能力を高めることが幸せに繋がる」と信じ込んでいました。だから、「少しでも学力を高めないといけない」という義務感がありました。しかし、この考えと出会い、無理してまで勉強に力を入れなくても大丈夫なんだと感じました。逆に好きなことに真剣に取り組むことがより良い将来へ繋がるのではと考えるようになりました。しかし、実際に行動しようとしても「能力信仰」が根付き、私自身「能力信仰」が抜けきれず、大人の庇護下にいる今は、好きなことだけに取り組む環境が整っていませんでした。だから私は、自分の意思で自由に生きるため、まずは「能力信仰」にとらわれないようにしながら、夢中になれる好きなことを見つけようと思います。そして見つけたら、それを活かせる環境で人生を謳歌してやろうと思っています。

私は、この本と出会い、勉強しないとダメだという考えから自分の好きなことを大切にする姿勢を大事にしたいという考えに変わり、肩の力を抜くことができています。だから私は、皆さんにも、自分の好きなことはもちろん、挑戦したいことも大切にしてほしいと思っています。しかし、周りの期待やプレッシャーからできない人も、私と似たような考えを受け入れ難い人もきっといると思います。だから、こんな考え方もあると知ってくれるだけでも嬉しいです。勉強する意図がわからない、好きなことだけして生きたいけど難しい。そう思い詰めている人は、これを機に自分の好きなことと向き合い、全力を注いでみるのはどうでしょうか。

『課題って必要ですか』

立命館守山中学校　２年

片　本　真　佳

「起きろー、遅刻すんでー」
親の大声と目覚ましの音で私は目を覚ました。やばい、寝坊した。時計を見ると家を出発するまで残り30分弱だった。私は慌てて布団から飛び出して、リビングへと向かった。その時、ふとロイロノートの画面が頭をよぎった。ぼんやりと赤い「募集中」の文字が浮かび上がる。
「あ、宿題してない」

課題は学校からのありがた迷惑だと思う。学校側から私たちの成績を心配して設けてくれているものだろうが、成績の良い悪いは自業自得。課題なんてしなくても、授業を受けて、テスト２週間前からしっかり勉強しておけば、成績はそこまで悪くならないと思う。テスト以外では時々苦手分野の復習をしておこうかなぐらいで良い。なんで学校の勉強を自分の休息に持ち込まないといけないんだろう。こんな理由はいくらでも出てくる。その中でも課題を無くして欲しいと時に感じる理由を三つ挙げようと思う。

一つ目は、時間がないからだ。私は課題を登校中のバスや電車ですることが多々ある。部活して、塾に行って、帰ってご飯食べて、お風呂に入って、などとしていたら時間が全くない。何なら忙しくて覚えていない。先生が一日を百時間ぐらいにしてくれたら課題を大量に出してもいいと思う。しかし、24時間のうちに課題をやる時間なんてほとんど取れない。大切な土日や睡眠時間が削れていってしまっている。長期休み前、先生が必ず言うことがある。
「長期休みなので普段はできないことをしてみてください」
友達と遊ぶこととかゲームとか、そんなの毎日させて欲しい。「こっちは青春で忙しいんだよ」と全国の先生に言いたい。

二つ目は、課題をするスピードに個人差があるからだ。私は課題をするのが遅い方だ。いつも難しい応用問題に手こずって、よく提出が遅れてしまう。しかし、課題には提出が遅れると減点されてしまうというルールがある。減点されるのは嫌だ。でも、空白のまま提出するのも気持ち悪い。そんな時、私は答えを見る。答えを見て、分かったような気になって、ノートに写して、ロイロの提出ボックスに出す。このような結局答えを見なければならない状況になるのなら、課題が出される意味って何なのだろう。できるスピードには個人差があるのに「同じ問題を同じ提出期限までに出しなさい」は無茶苦茶だと思う。ノートが赤文字でいっぱいになっていくとモチベーションが下がる。勉強がどんどん嫌いになる課題なんて誰もしたがらない。

三つ目は、課題の量が多すぎるからだ。色々な教科から同じ時期に課題がドバッと出されることなんてあるあるだ。例えば、長期休み。「普段できないことをしてください」に矛盾した量が出される。それも問題集に加え、チャレンジクッキング、レポート、インタビューなどの大変な課題が沢山出される。更に、テスト前。テスト範囲表と言って配られたものが課題の一覧表だ。そんな大量な課題を期限までに終わらせることばかり頑張って、テスト範囲の復習どころではない。夏休み最終日に課題を思い出してブルーになるのはもうごめんだ。

このような理由から私は課題を無くしてほしいと訴える。「課題がないとどうせ勉強しないじゃないか」と感じた先生もいると思う。いやいやいや、子供を舐めないでください。課題なんてしなくても私たちは勉強している。ゲーム、テレビ、SNS。学ぶフィールドなんてどこにでも存在している。課題は成績のために勉強しているみたいで私は嫌だ。自分が学びたいことに使う時間を削るのは勿体ない。
課題って必要ですか。

『いま、命があるということ』

県立守山中学校　２年

林　　淑　乃

今年の１月、私の曾祖母が亡くなりました。96年という長い人生でした。深いシワが刻まれた、少し骨張った手がそれを物語っていました。曾祖母は私が物心ついたころにはほとんど動くことができなくなっていたので一緒に遊んだりした記憶はありません。ただ、笑顔がすてきな優しい人だったことは覚えています。小学校低学年のころ病院にお見舞いに行ったときは、看護師さんがとても優しいという話や、看病してもらえるのは本当にありがたいという話をしてくれました。私はそんな曾祖母のことが大好きで、きっと私だけではなく曾祖母を知る多くの人が同じことを感じていたと思います。

葬儀の日、最後にあいさつをしようと曾祖母の手をにぎって驚きました。その手は、とても冷たくなっていました。ほんの数週間前にお見舞いに行ったときには、あんなにあたたかい手をしていたのに。私の手をにぎり返してくれたのに。そう思うと、次から次へと涙があふれてきて止まりませんでした。

曾祖母の死を通して、私はあらためて命の大切さについて考えるようになりました。今までは生きているということがあまりにも当たり前で、考えたことすらありませんでした。でもそれは当たり前のことではないのです。世の中には病気や貧困、戦争などによって命が奪われてしまう人がいます。その人たちにとっては、命は当たり前ではないでしょう。きっと毎日を一生懸命に生きています。私は今まで、命があることを幸せに思って生きてきたでしょうか。今、こうして生きていることを、ありがたいと思ってきたでしょうか。自分がとても恵まれているということに気づき、私は恥ずかしくなりました。

命があるのは素晴らしいことです。毎日を平和に生きられているのなら、尚更です。私たちは、それを忘れてはならないと思います。そう思っても、命の大切さというのはあまりにも大きなテーマで、頭では分かっていても実際に理解するのは難しいです。

けれど、曾祖母の死を経験して、私に一つだけ分かることがあります。それは誰かの死によって多くの人が悲しむということです。命は、自分のものであり他人と共有しているものでもあると思います。様々な人が私の人生を助け、私という一つの命と関わっています。私は曾祖母の手から、命のあたたかさを感じました。曾祖母の生き方から、毎日を一生懸命に生きることや命があることのありがたみを学びました。曾祖母は亡くなってしまったけれど、私がつないでもらった命と曾祖母に教えてもらったことは、今も残っています。

いま、命があるということ。それは命の火を最後まで燃やし続けるということです。生きていることに感謝し、これからの人生を悔いのないように過ごしたいです。

『変わりゆく農業』

明富中学校　２年

西　村　駿　佑

今年のゴールデンウィーク、私は祖父の田で田植えをした。田植機を使い快適に作業を進めることができた。苗と肥料を同時に植え、まくことができるので非常に便利だと思った。昔は手作業で苗を植えなければならなかったと考えると大変でさぞ苦労したんだろうなと感じた。私も手作業で苗を植えたことがあるが、ぬかるんでいて、足をとられると身動きをとるのが難しく、一歩動くのがとても大変だった。昔の人の忍耐強さを尊敬した。

昔の農業は主に人力と家畜で行われており、機械化はほとんど進んでいなかった。田を耕すには、幅の広い刃に柄をつけたくわという農具を使ったり、馬耕や馬鍬という道具を馬や牛にひかせたりしていた。田植え、稲刈りでは一つ一つを全て手作業で長い時間をかけて行っていた。現在では、科学とテクノロジーの進歩により、機械化が大幅に進んだ。田を耕すにはトラクター、田植えには田植機、稲刈りにはコンバインが使われるようになり、作業時間の削減、生産性の向上へとつながった。その反面、問題点もある。機械は維持費や購入のためのお金が必要となってくることだ。田植機なら一台買うために数十万から数百万円もの費用が必要となる。コンバインでは数百万から数千万円かかる。個体によるが、全て揃えるには少なくとも二千万円程かかる。また、円安の影響で機械に使う燃料費や光熱費などが高騰し、さらにお金がかかるようになってしまっている。機械化は農業従事者を楽にするための開発なのに、コストがかかり、かえって農業従事者の負担になってしまっているため本末転倒だと思う。農業だけでは利益を生み出すことが難しく、よりよい生活を維持していくことを困難にしている。これが若者の農業離れを引き起こしている原因の一つだと考えられる。国内の食料自給率をみてみると、令和４年度は38パーセント（農林水産省「食料需給表」より）となっていて先進国の中では最低水準となっている。他国が不作になった時や現在のような円安で物価高となっていると輸入任せでは国内に食料が行き渡らなくなる不安があるため、自国の食料自給率を上げたほうが日本の経済的に良いと思った。これらのことから機械化による負担を少なくし、農業就業率を高めることが必要だと考える。

そこで、私はみんなでお金を出し合い、一つの機械を買うことを提案する。

なぜなら、町や区で農業している人でグループをつくり、全員でお金を出し合えば一人にかかるコストをできるだけ少なくすることができるからだ。また、一つの機械を全員で使うことで農業従事者同士のつながりができ、お互いに意見交換をする場を作ることができるので、初心者でも質の高い農作物を作ることができると考える。さらに、グループ内で協力すれば、人手が補え、天災や害虫被害にも即座に対応することができる。つまり、地域の農業従事者との関わりも大事にしつつ、コスト面もできるだけ少なくすることができるため若者や高齢者にも気軽に農業をすることができると考える。

このようなことをふまえ、私は祖父が行っている米づくりを続けたいと思った。また、米づくりには、地域との関わりを深めたり、ものづくりのやりがいを感じることができたり、自然に向き合うことができる、という魅力があると思う。その代々続いている米づくりを時代のニーズに合わせながら、受け継いでいきたいと思う。

『誰もが生きやすい社会を目指して』

守山北中学校　２年

村　田　一　華

みなさんは、今ある社会が生きやすいと感じていますか。私は、様々な技術が発展し、便利なことが増えている今の社会は段々と生きやすくなっていると思っていました。しかし、今の社会はまだまだ生きやすい社会には遠く、むしろ、生きにくくなっている場面があるのではないかと実感する出来事がありました。

私の祖父の家はお寺です。インターネットで祖父のお寺を調べたときのことです。口コミを見たとき、このようなことが書かれていました。「坊さんが何喋ってるかわからない。人に伝える気ゼロ。」そう書かれていました。祖父は、病気で体半分が麻痺しており、車椅子生活をしています。その影響で声が聞き取りづらいときがあります。この口コミを見たとき、私は「言われた人がどう思うのか考えて書いたのか？」と思いました。そんなことを平気で書かれる社会が、生きやすい社会だと言えますか。この口コミだけではありません。SNSでの誹謗中傷もそうです。この社会では生きにくいと感じる場面が多くあります。私はこれらを見て、とても辛い気持ちになりました。発言、行動にはしていいことと悪いことがあります。それをなぜ区別できないのか、自分がしていることが他の人に大きな影響を与えていると気づいているのか、そう感じました。言われる側になったら、ほとんどの人が傷つくでしょう。自分の心の中でその人の何かが嫌だなと思ったり、その人が苦手だなと思ったりするときは人間だからあります。しかし、それはあくまでも私基準の視点であり、絶対的な正解とは言えません。だからこそ、それは本当にしていい発言、行動なのか心の中で一度立ち止まって考えるようにすることが大切だと思うのです。

私は、この辛い出来事が起きた理由の中に「こうあるべき」という考え方があるのではないかと思います。社会の中で物事を区別する基準はたくさんあります。たとえば、性別、年齢、職業、家庭での役割などさまざまです。「男だから、女だから」「親だから、子どもだから」といった枠の中に入っていなければならないという考え方にしばられがちなときがあります。祖父は、「お寺の住職だからこうあるべき」という考え方から非難されたのではないかと思います。祖父は、十二年前に病気になってからもできるだけ聞き取りやすく話せるように一生懸命練習していました。不自由ながらもあきらめずに頑張ってきたのにもかかわらず、このような誹謗中傷を受けることになってしまいました。

「こうあるべき」と理想を持つことは一つの目標となり、大きなエネルギーになることもあると思います。しかし、その理想にとらわれすぎることなく、思いやりの気持ちを忘れずにさまざまなあり方をお互いに認め合える社会が生きやすい社会へと繋がると思います。

生きやすい社会づくりを他人任せにせず、自分も責任を持ち、大切な社会の一員として誰もが平等に輝けるような社会をつくりあげていきたいというのが私の思いです。私たちがそのような社会のために貢献できることはたくさんあります。たとえば、困っている人に声をかけたり、電車やバスで席を譲ったりすることなどです。「私には関係ない。」そう思ってしまうときもあります。でも、そのときこそ、自分にできることを考えて行動にうつすべきなのではないでしょうか。

私は、これからの社会を生きていく中で人の気持ちに寄り添い、嬉しいことや辛いことを分かち合って過ごしていきたいと思います。みなさん、これから誰もが生きやすい社会を私たち自身の手でつくっていきませんか。

『今のバリアフリーの現状』

守山南中学校　２年

斉　戸　悠　真

私には三才下の妹がいます。妹は生まれつき脳性まひという病気を抱えて生まれてきました。そのため、首が座っておらず、座位がとれません。だから座位保持装置という通常とは少しだけ違う車いすに乗って生活しています。

昔は、妹が小さかったため、両親が抱っこひもに入れて移動ができていました。最近は成長とともに身長も伸びて、体重も増えてきたため、抱っこひもは使えなくなりました。

父が家にいる時は大丈夫ですが、父が仕事で家にいない時は、母が一人で妹を連れて、買い物へ行くことになりますが、それも難しくなりました。最近は私が妹の見守りを自宅でするようになり、家族で出かけることは少なくなってしまいました。それでもやはり家族とお出かけするときは、座位保持装置のついた車いすの移動になります。だからエレベーターやスロープなどのバリアフリーがないところには、行けません。たとえお店の中に入れたとしても、車いすが入れるようなスペースがないときは、入店できないので、私たち家族はもちろん辛いのですが、妹も辛く悲しい思いをしているように見えます。

去年の夏、家族と箱根に旅行へ行きました。昼食はレストランでとろうとなったときに、車いすでの入店は厳しいと二件断られました。結局、坂の上のレストランにしか入れなかったのですが、その坂はとても急で、両親二人と私の三人で押さないと登ることができませんでした。

さらに、トイレの問題も深刻です。私たちは、トイレに行きたいと思ったらすぐにトイレを見つけて行くことができます。しかし妹はそうではありません。身障者トイレを探さないといけないからです。体が小さい頃は赤ちゃん用のおむつ交換台でもよかったのですが、今は、もう乗りきれなくなりました。今は、ベッドのような大きさの台があるところでないと使えません。せっかく身障者トイレを見つけても、この大きなベッドのような台がないトイレが多いので、トイレ探しも大変です。しかし、この大人用の大きな交換台があるトイレがなかなかありませんので車まで戻り、車で交換していることも少なくありません。

バリアフリーと言われて何十年も経っていますが、私は本当のバリアフリーは浸透していないと思います。

もし、世の中にバリアフリーが浸透していたら、僕の妹も、さらに私たちのような家族でも気軽に外出してみようと思うのです。例えば、中学校のトイレもベッドのあるトイレは各階にはなく、四階中二つの階しかありませんでした。僕たちは、わざわざベッドのあるトイレを探さなくてはいけません。気軽に「行こう」と思えないのです。でも、あらかじめ、案内板やスマートフォンで、どこの階のどこのトイレにベッド設置のトイレがあるか分かれば、家族は心づもりができるので、気軽に外出…とまではいかないけれども安心はできます。

いままで不便な経験しかしてこなかったけれども、今回はどうすればいいかと考えるきっかけになりました。私は、作文で人に伝えていきたいと思います。だれか一人でも心が動いてくれればいいなと思います。

『人は助け合う存在』

市立守山中学校　１年

上　田　恵　衣

2024年１月１日午後４時15分ごろ、日本中、新年の祝いで笑顔があふれていました。でも、ある所では一瞬で笑顔が恐怖に変わりました。それは「能登半島地震」です。

私は能登半島地震が起きる直前まで外でいとことおにごっこをしていました。その直後視界が大きく揺れ私はすぐしゃがみました。ふといとこの方を見るとさっきまでの楽しそうな表情が恐怖の表情に変わっていました。その後私も怖くなり家に戻りました。親せきの家族も集まっていて一人がスマホを見て口を動かしました。

「石川で震度７の地震があったんだって」

そのとき私は、更に不安でいっぱいになりました。それから数時間がたちテレビをつけるとそこに写っていたのはとても悲惨な光景でした。私達が楽しく遊んでいたときに石川ではこんなにも悲惨なことが起こっていた、と思うととても胸が痛くなりました。それからはいつニュースを見ても地震のことばかりで、しかも日に日に状況が悪化していきました。地震から日がたつにつれてどんどん増えていく行方不明者や被害数。毎日胸が痛くなっていきました。私はこの地震は南海トラフ地震の前兆なのではないか、もしかしたらまた地震が起こるんじゃないだろうかと不安に思いました。でも、今心配するのはそのことではなくて、被害を受けた人達の心配をし、寄りそってあげることなのだ。と気付きました。私も怖かったけれど、もっと不安な気持ちで過ごしている人がたくさんいると思うと、私の中にある考えはなんてばかばかしいのだろうとはずかしくなりました。

それからは今、自分になにができるかを考えました。例えば地震の被害を受けた地域に募金をしたり、被災したところに行ってお手伝いをしたりと自分にもできることがたくさんあると気付けました。その中から私は自分にできそうなことを考え、募金をすることにしました。募金をしようと思ったきっかけは、近くのコンビニに行くと募金箱が置いてあったからです。次の日に私はコンビニでおこづかいから募金をしました。少しでも被災した人達の力になり励ましになっていたらいいな、と思いました。

冬休みが終わり、学校で久しぶりにみんなに出会うとやっぱり地震の話で持ちきりでした。私も友達とその話をしているとある友達がこう私に言ってきました。

「新年早々地震とか最悪だよね」

私はこの言葉を聞いて咄嗟に

「そうだね」

と答えました。でも今思うと、この友達とのやりとりはあまり良いことではありません。被害をうけた人のことを考えると、軽い気持ちからの発言だったなと思うからです。たしかに新しい年が始まってみんながワイワイ楽しんでいたときに地震がきたので悲しい思いや怖い思いを私もして、お正月気分ではなくなりました。しかし、被災された人たちはもっと最悪でつらい思いをしていたはずです。

日本中の多くの人や他の国の人までもが、同じ思いを行動にうつし、みんなが一つになれた気がして、最初の日から協力する大切さを学ぶことができたのは良かったかなと思います。

私はこの能登半島地震から学んだことがあります。それは「協力することのすばらしさと大切さ」です。これからもこの思いを忘れずに生活していきたいです。

『本が魅せる世界』

立命館守山中学校　１年

片　山　り　さ

質問です。皆さんはこの一か月で本を何冊読みましたか。10冊ですか、20冊ですか、30冊ですか、40冊ですか、それとも0冊ですか。私はこの一か月で本を62冊読みました。かなりの本好きです。今日はそんな私が大好きな本の魅力を三つ紹介します。

本の魅力は大きく分けて三つです。一つ目は「文章だけで表現されたものを自分で読み取ること」だと考えています。

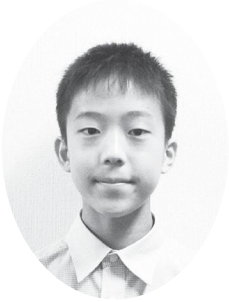
本に音や絵はないので、言葉だけでその人物の心情や表情を読み取らないといけません。これはとても難しいことですが一生懸命頑張り食らいついて本を読み続けていると微妙な文末表現や言い回しでなんとなく想像することができます。これがわかるようになっていくと、こうとも考えられるな、こうとも読み取れるな、という風に本を読むのが楽しくなってきます。だから、私は「視野も広がる」と考えています。筆者の思考が深く長く書かれている本に完全に賛同する必要はありませんが、あくまで資料として見ることで自分の考えを深めたり変化させたりするきっかけになると考えています。

二つ目は、「本の文体や表現がどの筆者も違っており、どれもその筆者にしか書けない表現だということ」です。私は最初、東野圭吾さんと小林泰三さんという二人の筆者の本しか読んだことがなかったのですが、これは一度気づくとかなり面白いです。

具体的に言うと「笑い声」です。宮沢賢治の「かぷかぷ」や「くふくふ」。吉屋信子の「ほほほ」。樋口一葉の「きききっ」。紫式部の「むむむ」などです。他にも雨音、建物の表し方、全て他の誰にも書けない、その筆者にしか魅せられない、たった一つの表現です。これが本の最大の魅力だと考えています。

三つ目は、「誰でも、どこでも手に入れられること」です。本は書店でお金を払って読まないといけないと思いがちですが、守山図書館や学校の図書室などでは、無料で本が読めます。また、本は軽いので、学校でも食堂でも電車でも帰り道であってもタクシーでもどこでも読む事ができます。また、読まなくなった本は守山図書館や学校へ寄付したらいいと思います。そうすれば、本を捨てるという無駄な時間やお金は無くなるし、本が本当に欲しい人の元へ届いていきます。また、そうする事で本が誰でも手に入れることができます。

これらが私が本が大好きな理由です。本は古臭くて面白味に欠けているように見えるかもしれません。実際、今は本好きな私も昔は本が大嫌いでした。「スマホの方が本なんかより楽しい。」「本なんて古い。」そう思っていました。しかし、それは幼心にあった本への決めつけでした。ある一瞬の出来事でその本に対する印象は一変します。ある日、私の父は私に一冊の本を勧めました。それは水木しげるの「ヒットラー」でした。それまでも父は私にたくさんの本を勧めていましたが、それまでは手もつけませんでした。しかし、その時の私は水木しげるさん原作のアニメである「ゲゲゲの鬼太郎」にはまっていたので、少し気になってその本を手に取りました。最初は苦戦しましたが、読んでいる内に私はその本の興味深い言い回し、ドキドキで斬新な展開に「楽しい」「もっと読みたい」「なぜかやめられない」と思うようになり、次の日からは、父に本を借りて一冊ずつ読むようになっていきました。そして現在では、自ら本を求めて書店や図書室へ足を運ぶようになりました。このことは今でも信じられないぐらい、「自分が変化した」瞬間だと思っています。本は人をどんどん引き寄せて、どんな娯楽よりも楽しくて飽きない究極の娯楽だと思っています。皆さんもこの話を聞いて本を一冊でも読むきっかけになればいいなと思います。本が魅せる世界、それは読み手に溢れるような知識を与えて、読み手を無我夢中にさせるような美しい幻想です。



『「知る」ことから始める』

県立守山中学校　１年

増谷　壮大良

僕は食物アレルギーがありました。スーパーに買い物に行くときにも、食べられないものが入っていないか確認してから買ったり、学校の給食でも家から別のものを持っていったりという生活でした。食べたくても食べられないものがあるということは、とても大変でした。「なぜ自分は食べられないんだろう」と、小さかった僕は思っていました。

小学生の頃、アレルギーについてインターネットで調べてみました。その結果、アレルギーは特定の食べ物を口にした際に、免疫が食べたものを異物だと勘違いし、体に症状が現れることだということがわかりました。僕の場合、症状は主にじんましんでしたが、他にもいろいろあります。中には命の危険におちいることがある症状もあります。みなさんの周りには、食物アレルギーを持っている人はいませんか。そうした人がいた場合、自分の思い込みで決めつけず、適切な対応をすることが大切です。例えば、その人が食べてはいけないものに触れることがないように配慮するということが挙げられます。しかし、一番大切なことは、否定せずに受け入れることです。周りの人から受け入れられると、とても安心します。

僕は、小学５年生のとき、アレルギー物質を含む食べ物を少量ずつ何回かに分けて食べ、体の反応を見ながら、徐々に量を増やしていくことで、少しずつ食べられるようになりました。食べたくても食べることができなかったものが初めて食べられるようになり、美味しくて感動したことは、今でも忘れません。このことから僕は、挑戦することの大切さを実感しました。

僕の将来の夢は、薬を作る人になることです。なぜなら、自分の経験を活かして世界中のアレルギーや病気で困っている人に寄り添いたいからです。初めて食べたときのあの感動を、他のアレルギーを持っている人たちにも味わってほしいのです。そういう人たちのために、アレルギーを治す薬を開発したいです。また、みなさんにも、食物アレルギーのことをよく知ってもらえると、とてもうれしいです。「知る」ということは、それほど難しいことではありません。ただ知ってもらうだけでも、食物アレルギーを持っている人からしたらとても大きなことです。だから、みなさんにもぜひ「知る」ことから始めてほしいです。

今世界には、アレルギーをはじめ、さまざまな病気があり、それにより困っている人たちがいます。僕も、そのことについて、まずは「知る」ことから始めていきたいです。「知る」ということは、物事を始めるための第一歩だと僕は思います。そこから、自分がまだ知らない新しい世界が見えてくるのだと思います。

今後、たくさんのことを経験すると思いますが、どんなことでも、まずは「知る」ということから始めることを、大切にしていきたいです。

『命の価値』

明富中学校　１年

石　出　渉　真

ぼくの家は現在３匹犬を飼っています。３匹目に飼ったポメラニアンのトワには生まれつき片目がありません。

トワとの出会いは3年前ペットショップで里親募集のはり紙を見て会いに行ったことがきっかけです。片目がないのでペットショップでは値段がつかず、このままだれも飼わなければ殺処分もあるかもしれないというのをお店の方から聞いて、３匹目の犬を飼うことになりました。

最初、家に来たときは物にぶつからないかとても心配でしたが元気に走り回って、ごはんも二食きっちり食べていました。こんなにも元気なのに片目がないというだけで値段がつかなくなるのはおかしいと思います。色んなペットショップを見てきたけどいつも元気な犬しかいないのでこんな子たちが生まれてるのもぼくは知りませんでした。大切な命なのに人間の商売道具として価値が決まってしまうのはとても悲しいです。動物にも感情があるのでどんな子が生まれても大切にしてほしいです。

トワを飼うときも家族でかなり話し合いました。他に病気がかくれてないのか、もし病気があったとしても最後まで責任を持って育てていけるのか家族会議もたくさんしました。また、すでにいる二匹ともうまくやっていけるのか、二匹に受け入れてもらえるかなど問題はたくさんありました。そのため、トワを受け入れてからは、ゲージを工夫したり、前からいた、二匹とも少しずつ慣れさせるように、初めはちがう部屋で育てていきました。時間をかけて少しずつ慣れさせたおかげで今ではとっても仲の良い三匹になりました。トワも二匹の真似をするようになり、お手やおすわりやトイレのやり方まで覚えるようになりました。散歩も毎日同じ道を通り危ないところはだっこしたり、リードを短く持ったりして危険な目にあわないように色々な工夫をしました。また、思いっきり走らせてあげたかったので、だれもいない時間をねらってリードを外したり、ドッグランにも連れていきました。車で遠くに住む祖父の家まで会いに行ったりもしました。祖父も犬がとても大好きなのでトワを迎え入れたことをとても喜んでいました。3匹にはこれから色んな経験をさせてあげたいです。犬も家族の一員です。これからもずっと一緒にいたいです。

そういえば、犬の命は人間に比べてかなり短いと両親が話していました。人間の一日は犬にとっては一週間だそうです。留守番をさせて一日過ごさせた日はいつもごめんねと心の中で思います。いつかお別れが来る日の事を考えると悲しくなってきます。トワには、うちの家に来てよかったと思ってもらえるようにこれからも大事にしていこうと思います。世の中には家族の一員としてかわいがられている犬もたくさんいますが、色んな理由で捨てられる犬もたくさんいます。生き物を飼う時には最後まで飼えるのかきちんと考えて飼ってほしいと思います。色んな動物たちが幸せになれたらいいなと思います。

『平和のためにできること』

守山北中学校　１年

森　田　景　音

みなさんは家族を愛していますか。そして、家族を愛することが平和に繋がることを、知っていますか。

私の周りでたまに、「親がうざい」と言っているのを耳にすることがあります。たとえ冗談だとしても、本当にそんなことを言ってもいいのでしょうか。

両親は、私たちの色々なことを心配したり、家事を毎日欠かさずにしたりしてくれています。家族が食べるごはんの食材を毎日買ってきてくれること、それを使ってごはんを作ってくれること。当たり前のようにやってもらっていることの中に、大変な努力が詰まっています。私たちのためをいつも思ってくれているからこそ、できることだと思います。

「両親や家族を殺害した」というニュースを、テレビで見たことがあります。私は、殺人事件で一番多い被害者を調べてみたのですが、加害者と家族や親族関係にある被害者が41.6パーセントと、最も多いことに驚きました。そこで、殺害してしまった理由についても考えてみました。これもテレビで見たことですが、今の日本には虐待や家庭内暴力など、家庭環境の問題が数多くあるそうです。それならば、家族一人ひとりの愛があれば、未来は違ったのではないでしょうか。愛されている、思ってもらっているという実感があれば、その人は家族を殺さずに幸せに暮らすことができたのではないかと、私は思います。

次に、私は家族を愛するために何をしたらいいかを考えてみました。それは、家に帰ったら家族と話し、そして笑う。その当たり前の一瞬一瞬を大事にして、家族と笑いあった出来事やぬくもりを忘れないことだと思います。私の場合は、面白かった出来事を姉達と共有しています。笑い合ったことをいつまでも覚えていて、その思い出話をするといつでも大笑いします。

毎日畑に行き、家族が食べる野菜を作ってくれるおじいちゃん。いつも美味しいごはんを作ってくれるおばあちゃん。私のためを思い、ちゃんと怒ってくれるおば。家族思いで、困った時に助けてくれる頼もしい父。私がうつむいた時、笑わせてくれる、優しくて面白い母。話をすると最後まで真剣に話を聞いてくれる、一番上の姉。勉強のわからないところを最後まで教えてくれる、二番目の姉。

このように、家族のすばらしいところはたくさんあります。それを忘れないで過ごすことはとても大切です。また、家族を思いやる心を育むことで、家族以外の周りの人たちにも思いやりをもって接することができるようになると、私は思います。

今まで当たり前だった、家族を愛すること。私はその大切さを、他の人たちにも伝えていきたいです。みなさんも、家に帰って家族と話す一瞬一瞬を愛していきませんか。そうすれば、平和で明るく、みんなが安心して生きていけるような未来をつくっていけるのではないでしょうか。

様々な問題を乗り越え、平和になった世界はどのようになっているのでしょうか。殺人も減り、みんなが当たり前のように家族や周りの人たちを愛し、愛されている世界。様々な問題はみんなで乗り越え、みんなで笑い合って、自然と笑顔になる世界。家族や周りの人たちの愛にふれながら、生きていく世界。こんな素敵な世界をつくることを、私は願っています。

未来のために、平和のために、今自分ができることを、一緒に考えて生きていきませんか。「家族を愛する」という、ほんの小さなスタートから平和は始まっていくのだと、私は確信しています。

『当たり前を幸せに』

守山南中学校　１年

中　島　南　実

「みんなで珠洲いこうねぇ。」

１月１日元旦に親戚で集まり話していた。

その時、テレビとスマートフォンからけたたましいサイレンの音が鳴り響いた。私は急いで机の下に潜り込んだ。これが能登半島地震だった。

石川県珠洲市。ここは祖母の生まれ故郷である。珠洲市の状況を確認するため詳しく調べている中で、あるニュースの記事を見つけた。

石川県珠洲市で能登半島地震に遭い、妻と三人の子どもを亡くした大間圭介さん。圭介さんは珠洲署の警備課長であり、地震の際、緊急出勤しなければならなかった。

「今からお父さん仕事に行かなくちゃいけないから。」

と家を後にした。今まで家族と過ごしていた家が土砂に飲み込まれていた。

「助けられなくてごめんね。」

その声はもう届かない。自分にとって一番大切な妻や子どもがいなくなり、これからどんな思いで生きていくのだろうか。身近な人の死を経験していない私には想像すら難しい。けれども想像することはその人を理解しようとするためにとても大切なことだ。

警察官は人を守り助ける仕事である。圭介さんは家族のことを一番助けたかっただろう。私の父も警察官なので、こういった地震などが起こった場合、父も緊急出勤しなければならない。その時もし、不慮の事故で家族の形が崩れてしまったらどうなるのだろうか。

圭介さんと同じ状況になってしまったとき、私はどんな思いを抱きながら、これからの人生を歩んでいくのか、どのような考え方をするのか。当たり前が突然なくなり現実を受け入れられないかもしれない。

圭介さんがメディアに出る理由は、「誰が何と言おうと、妻と子どもたちの生きた証を知ってほしい」からだと言う。私は、明日があるのは当たり前ではないと伝え、すべての人に今ある時間を大切にしてほしい、そんな思いが圭介さんを動かすのだと思う。私たちが生きているこの時間は、誰かが生きたくても生きられなかった、大切な大切な時間なのだから。

中学校生活が始まり三ヵ月が経とうとしている。学校生活にも慣れ、面倒に感じたり、退屈に感じたりすることが増えてきているかもしれない。日常に慣れてしまうと、何かがあること、何かができることを当たり前だと思ってしまう。けれども、私たちのような学校生活を送れなかった人もいるということを忘れてはいけない。

日々の生活をどうしたらもっと大切にできるのだろうか。例えば友達付き合いの中で、何気ない言葉で相手を傷つけてしまうことがある。たとえ些細な一言でも、言葉は相手を喜ばせたり反対に傷つけることもできる。言葉の使い方でその人の感情を動かすことができるということだ。人を喜ばせたり、優しい気持ちにできるなら、そう言った言葉を使うことを心掛けたい。

当たり前のように生きているこの時間は、いつかは当たり前でなくなってしまうかもしれない。明日誰かが死んでしまうなんて、誰にも分からない。私は一日一日を大切に生きて、今あるこの時間に感謝したい。朝起きたら家族がいて、学校に行けば友達に会える。おいしいご飯が毎日食べられる。大切な人と一緒にいられる。どれも、生きていなければできないことだ。朝、みんなにおはよう。食事のときは、いただきます、ごちそうさま。何かしてもらったら、ありがとう。感謝できるときに感謝を伝えよう。そして何気ない毎日を大切にし、懸命に生きていく。これが私に今できる最大のことだ。

『教　訓』

市立守山中学校　３年

横田　悠一郎

私はこれまでの人生で「ウルトラマン」への愛を貫き通してきました。ウルトラシリーズの熱烈なファンです。自分たちより二十数倍も大きな宇宙人たちが私たちを愛し、護ろうと全力を尽くしてくれる。そんな姿から、人間が彼らに護られるに値する存在になるにはどうすればよいのかを考えさせられます。また、ただ巨悪に立ち向かう格好の良い姿を見せるだけでなく、私たちに何が正しいのか、目の前にそびえ立つ大きな壁を超えるにはどうすればよいのかを考えさせてくれる素晴らしき作品です。

そんなウルトラシリーズには2024年現在、58年もの歴史があり、お年寄りから子供まで幅広い世代の人々に愛されています。イベントへ行けば、親子連れのみならず、若者や老夫婦の姿も多く見受けられ、老若男女に愛される素晴らしいシリーズであることを強く実感させられます。しかし、ここまでファンの層が広いと大人と子供の認識の違いに驚かさせることが多々あるのです。

子供向けヒーロー番組を見ていると必ず耳にする言葉があります。それは「子供は、子供騙しの低俗な作品を作れば、それを見破り相手にしなくなる。」というものです。これはクリエーターたちの持つ、「子供だからといって舐めたものを作るのではなく、子供相手だからこそ良いものを作っていこう。」という仕事に対する熱意から生まれた言葉です。子供に夢を与える仕事だからこそ、妥協は許さないという姿勢が見える格好いい言葉です。しかし、この言葉は、大人たちからの評判があまり良くない作品に対しての批判に利用されてしまうことも多いのです。ウルトラシリーズには「ウルトラマントリガーNEWGENERATIONTIGA」という作品があるのですが、この作品は大人たちからは脚本の出来やシリーズ構成の悪さから「子供騙しだ」と不評です。しかし、クリエーターたちがこだわった特撮シーンなどの大迫力の映像、そしてトリガーというキャラクターのデザインの良さから、子供たちに一定の人気がある作品になっています。

何故、このように世代間で人気の差が生まれてしまうのでしょうか。それは、おそらく大人と子供の年齢層による「視点」の違いにあるのだと思います。大人は、子供と比べて豊富な人生経験から人の心情をより深く読めるようになっているのでドラマパートにも注視しますが、子供はまだそういった部分を読み取る能力が発展途上です。そのため、心理描写を雰囲気でしか感じ取れず、それよりも派手で心躍る戦闘パートに夢中になります。そして、この視点の違いというものが大人と子供の考え方のズレを生み出し、双方の間に心の溝を作ってしまうことになるでしょう。だからこそ、私は思うのです。このまま成長するにつれて、今自分が持っている「視点」を失ってしまえば、子供や異なる世代の人々のことを理解できない古典的な人間になってしまうのではないかと。私は、今持っている「視点」も、抱いている情熱も、忘れてはいけない、失うわけにはいかない。と。

私は現在14歳。これから先、上手くいけばあと数十年は生きていくことでしょう。そうすれば年齢が自分より低い人間が次々に現れてきます。そんな人達に接するとき「視点の違い」が少なからずあるということを念頭に置き、相手のことを理解できるようになりたいです。「賢者は歴史に学び、愚者は経験に学ぶ」という言葉もあるので、私ごときの経験則から物事を見るのは悪手かもしれません。それでも私はあの日、大人に対して抱いた「そうじゃないんだよ」という思い、心の奥で熱く燃えていたパッションを失わず、ありのままの「物事」や「人」を見れるようにしていきたいです。

『「限られた時間」は濃い時間』

立命館守山中学校　３年

山　中　萌　衣

「おばあちゃん、長生きしてね、百歳まで生きてね！」ひいおばあちゃんに何度も言った気がします。私にとって、ひいおばあちゃんは、自慢のおばあちゃんでした。おばあちゃんはいつも大好きな果物やお菓子、笑顔や元気をくれました。おばあちゃんの家に行くことは私にとっての「楽しみ」でした。「逆上がりができるようになった！」「新しい友達ができた！」と、色々な話をする時間は私にとってかけがえのない大切な時間でした。私は小さい頃からおばあちゃんの家に行くと、必ずノートに似顔絵やメッセージを書きました。今までに書いてきた数々のノートは今も大切に残されています。ノートを見返すと、全てのページに「おばあちゃん長生きしてね。」と書いてあります。私の書いた絵を見て、微笑むおばあちゃんの姿を今も忘れられません。

おばあちゃんは九十歳になっても年齢を疑うくらい元気で、抜群の記憶力がありました。しかし、そんな元気なおばあちゃんに予期していなかった出来事が起こりました。それは年始のビデオ電話から始まりました。「やった、電話だ」と高ぶっていた私の気持ちは、ほんの一瞬で変わりました。「この前健康診断に行ってきたんやけどさ…。」と深刻そうな話が始まりました。母が、「え、何か引っかかったの…。」と慎重に尋ねると、返ってきた答えは癌でした。一瞬私は呆然としました。「あんなに元気なおばあちゃんが、なんで。」体中の水分が枯れるほど、涙が流れました。私にとって生まれてから一番苦しくて、泣いた日。しかし、おばあちゃんは変わらず笑顔でした。そして、私にこう話しかけました。「大丈夫や、めいちゃん、まだ生きれるから今日死ぬ訳ちゃうんやから。」この日から、強い薬と戦う生活が始まりました。高齢のため手術ができないと判断されたことで「時間の問題」なんだということは幼ない私にも分かりました。余命は二か月。「限られた人生」を初めて身近に感じました。私はおばあちゃんのような笑顔で最期を見守ろうと心に決めました。

お医者さんに伝えられた余命が嘘かのように二か月が過ぎ、さらに一か月が経ったある日、いつも通り「おばあちゃん、来たよ！」と家に入ると、そこにいたのは私の知っているおばあちゃんではありませんでした。苦しそうな顔で「しんどい。」と繰り返しています。「おばあちゃん！めいだよ、分かる？」とどれだけ叫んでも泣いても、笑顔で私の名前を呼んでくれることはもうありませんでした。この日の夜中、ひいおばあちゃんは永眠しました。私が会いに行くその日まで、一生懸命病気と闘ってくれたのです。「ありがとう。」私の心の中に残ったものは、悲しみや孤独ではなく感謝でした。

「おばあちゃん、長生きしてね。」と、書かれたノートは今も私とおばあちゃんの心を繋いでくれています。今もおばあちゃんと私は時々会うことができます。私が頑張った時、寂しくなった時は、いつもおばあちゃんの匂いがする風が吹きます。その度に「おばあちゃん、今日は友達とね。」と、誰にもばれないように呟く私がいます。時々吹くおばあちゃんのひと風は私をいつも支えてくれます。

大切な家族や友達にも死はいつか必ず訪れます。そして、残念なことに私たち人間はいつ死を迎えるか予測することはできません。私たちの「限られた時間」は生まれた瞬間からスタートしています。限られた時間や人生だからこそ、私たちは多くの幸せと共に苦しみや悲しみを感じることができ、濃い充実した生活を作り出せるのです。限られた時間を世界中の人が毎日必死に生きています。だから、私も自分の人生を濃い時間にしていきたいと強く思います。温かい風で今も支えてくれるおばあちゃんのように。おばあちゃんありがとう。

『言葉が持つ力』

県立守山中学校　３年

江　川　結　愛

私たちは、普段から言葉を使って生きています。日本人だけでなく、世界中の人々が言葉を話します。私は、言葉は生活に欠かせないものであり、同時に良くも悪くも人に影響を与えるものだと思います。「ありがとう」や「がんばれ」は人を励ましたり、幸せにしたりします。大会で友だちに応援されると嬉しくなって、がんばろうと思えます。でも言葉によって、人を傷つけることも簡単にできます。言葉はそういう力を持っています。

学校生活や通学路で様々な場所で耳にする言葉があります。命に直接関係するような言葉です。言っている人たちが本気で言っているわけではなく冗談で言っているのはわかります。ただ、私はその言葉を聞くたびにそれは本当に人に言っていいような言葉なのかなと思います。人に言うべき言葉ではないと思います。大切な人を亡くした人だけでなく、他の人も、不快な気持ちになる人は冗談であってもいると思います。冗談とはわかっているけれど本当に言われているんじゃないかと不安に思う人、傷つく人もいます。言葉を話すだけではありません。ネット、SNSでもそうです。ネットやSNSの場合、人を傷つけるだけではなく、多くの人がコメントを見ることができ、自分がコメントを削除をしても永遠に残ることがあります。ときには、炎上して人生が変わってしまうこともあります。実際そういった人はたくさんいます。冗談のつもりでも言葉は人を追いつめて大きな影響を与えます。私達が普段から言葉を使うからこそ、言葉の使い方には気を付けていかなければならないと思います。

しかし、初めにも言ったように言葉は悪いことだけではありません。自分や他の人を変えたり、幸せにしたりすることができます。例えば、自分がモヤモヤしたときに言葉にすることですっきりしたり、お礼を言ってもらえたりあいさつを返してもらえたりすると嬉しくなります。私は学校で陸上部に所属しています。普段の練習や大会では「ファイト！」という言葉がたくさん聞こえてきます。自分が走っていたりするときそういう言葉を聞くと、疲れていてももう少しがんばろうと前向きに明るくなれます。日によって調子はかなり変わり、調子が悪いときに、マイナスなことばかり言っていると気分も下がってしまいあまり結果がでません。でも、調子が悪くても今日はここまでがんばるぞという目標をたて、誰かにそれを話したりすることで達成するためにがんばろうと思えると結果はよくなります。部活を通して感じたのは、言葉には気持ちを変えられて、気持ちが変わるから行動を変えることができる強い力があるということです。その力を上手に使えるようになれるといいなと思います。

言葉は便利なものです。しかし、時には人を傷つけたりします。言葉は悪いことだけでなく、気持ちを伝えたりする大切な手段にもなります。大切なのは、使い方を考えて言葉を発することです。誰かを傷つけていないか、苦しませていないか、嫌な思いをさせていないか。言葉を選択して見直すことが必要となると思います。一人ひとりが相手のことを考えて言葉を使えば、言葉はもっとよりよいものになれると思います。人の心を変える言葉。だからこそ、相手を思いやってみんなが気持ちよくいられるようにしていきたいです。そして、自分の言葉が誰かにとってプラスとなれるようにしていきたいです。

『日本の上下関係のあり方について』

明富中学校　３年

青　木　鈴　奈

昔から日本の社会では、上下関係が重要視されています。学校生活の中であれば、先生や先輩に、会社などであれば上司に敬意を払い、そのような目上の人の指示には必ず従うというのが当たり前のようです。しかし、私はこのようなことが必ずしも正しいことであるとは限らないと思います。

なぜなら、もしも先輩や先生、上司が誤った判断をしてしまっていた時に、後輩や部下がその誤りを指摘しにくい環境であれば重大な失敗につながってしまうと思うからです。もしもそのような環境である場合、物事においてせっかく適正な判断をしている人がいるにも関わらず、その人が意見を述べる場を無くしてしまっていると思うのです。私自身、部活動で後輩へ向けて指示をすることがあります。しかし、その指示が必ず正しいかというと、そうでないこともあるかもしれません。

そして、もしも誤った判断をしてしまっている私に指摘しやすい環境があれば、私はしっかりと正しい判断の下、後輩を指導できるのです。まちがいやおかしいこと、そして立場をこえて自分の意見をしっかりと聞いてもらえる環境は大切です。まず、その後輩や部下である下の立場の人たちが意見を出しやすい環境を作るためには先輩、後輩同士でコミュニケーションを取ることが大切だと思います。もしも、下の立場であれば、自分の意見に自信を持ちその意見を発することが重要だと思います。しかし、指摘しつつも、相手を敬い、相手の意見も取り入れながら自分の意見を主張することが大切であると思います。

近ごろ、テレビやニュースでハラスメントという言葉を耳にすることが多くなりました。ハラスメントとは相手を不快にさせる行為のことです。例えば、職場でのパワハラやセクハラ、学校でのいじめもその一部です。ハラスメントは、昔に比べて重要視されるようになってきています。昔は、上司や先輩が部下や後輩にたいして厳しい言動をするのが普通とされていたようですが、今はそのような行為も問題視されることが増えてきています。しかし、世の中の風潮に感化されすぎたり、自分の立場を守るために何も言わなくなったりする、逆の問題も浮上していると聞きます。仕事上必要であっても上司が部下に対して適切な指導、アドバイスができないというのです。私はハラスメントという問題が重要視されるようになったことをいいことに、ちょっとしたことですぐにパワハラや、セクハラというのは違うのではないかなと思います。上司は自分の立場をしっかり守りつつ、下の立場の人が自分の意見を発信しやすい環境作りをすることが重要だと思いました。

上下関係のあり方が変化しつつある中でも、適切な意見発信や指摘ができる環境が求められています。先輩と後輩、上司と部下の間でのコミュニケーションが求められている現状がありますが、それと共にハラスメントなどに対する対応も求められています。このような難しい状況がある中でどのように対応していくかをよく考える必要があると思います。

私自身もこれから社会に出て、いろんな年代の人たちと関係を築き、仕事をしていくことになるでしょう。そんなときに、部下として、上司として、先輩として、後輩としてのあり方をより一層考えていきたいと思います。

『核心を追う人』

守山北中学校　３年

村　田　澪　音

コンピューターの歴史を変えたアップルの創設者スティーブ・ジョブズ。海賊団・麦わらの一味を率いて大海原を駆け抜けるモンキー・Ｄ・ルフィ。「リーダー」と呼ばれる人は数多く存在しますが、皆さんの考える「理想のリーダー」とは、どんなことができる人でしょうか。

私は今、吹奏楽部の部長を務めています。入部当初は楽器もしたことがなかった気弱な自分がまさか部長になるなんて、考えたこともありませんでした。物事をはっきりと口に出せず、人から意見を言われるとすぐ自分の考えを引っ込める私は、皆さんが考える「理想のリーダー」からは、ほど遠かったことでしょう。

ある日、練習内容について良くない事態が発生しました。本来なら部長として、しっかり注意するべきです。私は頭でそのことを理解しながらも、あと一歩を踏み出せずにいました。分かっているのに言えない。それは、この気弱な性格のせいだと思っていましたが、ふと私は嫌われることが怖いのだと気がつきました。私は、私に厳しく言われた人や、自分と異なる意見をもつ人から嫌われるかもしれないと、とても臆病になっていたのです。

いつも笑顔で怒らない、そんな人が「理想のリーダー」だと私は思っていました。しかし、笑顔であっても問題を見過ごすならば、理想どころかどんなリーダーでもありません。このままでは吹奏楽部はさらに悪い方向へ進んでしまいます。私は悩み、たくさんのことを考えました。なぜ吹奏楽部に入部したのか。何のために毎日必死に練習しているのか。

そして私は、部長として私にできる大切な役目に気づきました。それは、今何が大切なのかという「核心」を見失わないこと、そしてそれを部員にも伝えて共有することです。

私たちが忘れてはいけない「核心」とは、夏のコンクールという大舞台で、音楽を通して成長することです。そのためには練習態度を見直し、限られた活動時間をしっかり活用しなければいけません。また、演奏する楽器も個性もさまざまな部員たちが息をぴったりと合わせることも必要です。そのためにできることを考えて実行するのが、部長としての役目なのではないかと私は考えました。

毎日起こるたくさんの出来事の中で、私たちの心は様々に変化するけれど、その中で本当に大切にすべきことは何なのか、それを実行するためには何をすべきかを真剣に考える人、つまり「核心を追う人」であることが、今の私が考える理想のリーダーです。

そして、その気持ちを共有するためには、仲間に「核心に迫る言葉」をかけなければいけません。耳ざわりの良い言葉はふわふわとして気持ちがいいけれど、聞く人の心にも、物事の核心にも届かずに終わってしまうことがあるからです。自分への影響にひるまず、本当に大切だと思うことを正しく伝えることが必要です。私は自分の意見を笑顔で隠すことをやめ、思いをまっすぐ届けるようになりました。ピリッとした空気は一瞬で、その後嫌われた様子もなく、むしろ以前より仲間との距離も縮まったように感じられ、今ではそれが正解の合図だと思うようになりました。

ＳＮＳを覗いてみると、自分がどう思っているかよりも、多くの人に共感してもらうことが大切にされているような気がします。しかし、本当にそれで良いのでしょうか。一見平和なように見えても、共感ばかりが集まれば、意見は滞ります。もちろん、共感が悪いわけではありませんが、それでも私は、手軽な共感に流されていてはいけないと思います。色々な意見を出し、賛成したり反対したりするから、様々な見え方や考え方を知り、私たちは物事の核心に迫っていけるのです。

大切なことは何なのか。私はこれからも、「核心を追う人」であり続けたいです。

『平和をつくる仕事』

守山南中学校　３年

栗　田　莉　花

私の将来の夢は外国と日本をつなぐ仕事に就き、平和を築きあげる手助けをすることだ。この日本には昔、戦争があった。戦争は勝ち負けで決まるから人は戦争以外のことは見えなくなってしまう。いや、見てはいけなかったのかもしれない。失われていく民間人の命も、心にぽっかりと空いた穴も。我慢しないといけないのか。

私は修学旅行実行委員平和学習部部長として２年生の三学期から平和学習を行ってきた。私が一番心にドンと重くきたことは戦争の映画を見たことだ。家族で笑顔の絶えない日々を過ごしていたが戦争によって家族が離れ離れになり、笑顔が消えていく過酷で悲惨な戦争が映し出されていた。この映画を見て私は戦争からは何もうまれず、誰も幸せになれないと改めて思った。今でも世界では戦争や紛争が絶えず起こっている。私たちと同じ子供も命を失っている。尊い尊い命を。開発途上国という言葉がある。紛争などの影響で貧しい国だといわれている。あなたは数字が読めるだろうか。日本語が読めるだろうか。計算ができるだろうか。大抵の人ができると答えるだろう。なぜなら学校で教えてもらえるからだ。しかしそれが当たり前ではない国がある。開発途上国では最低の識字率で15％となっている。なぜこのようなことが起きてしまうのか。それは学校が近くにない、教育の質が低いという問題や戦争や紛争で学校に行けない期間が長くなり授業で落ちこぼれたり、いじめや差別を受けて学校に通えなくなったりするそうだ。また、家事や子育てを両親が仕事で忙しいために子供が担っていることも多く学校へ通っている時間がないなどの問題がある。私はどれだけ私たちが恵まれているのかを考えさせられた。当たり前のように学校へ行き勉強ができる環境にいられることが当たり前ではないことを強く感じた。世界に目を向けると今がどれだけ幸せなのかがとても感じられる。

今の私の夢は外交官かパイロットになることだ。最近、外国から様々な理由でくる人、日本からでる人など、世界とのいろいろなつながりが太くなってきている。自然と外国の文化や人と触れ合う機会が街の中にあふれているからこそ、外国の知識を知るきっかけが多いと思う。いろいろな国と仲良くしながら、また「戦争」という同じ失敗をくりかえさないために国際的な舞台で世界平和をつくりあげるピースになりたいと思う。日本人と外国人。国籍は違えど同じ人だ。人はみんな人それぞれの意見を持っている。どれだけ意見がちがっても折り合いをつけて誰も傷つかないような平和をつなぐピースになりたいと思う。そのためにもっと戦争について勉強し、外国の言葉を学んでいきたい。戦争による人々の苦しみや思いを背負い、一人残らず世界中の全ての人に明るい笑顔が輝くように戦争を語りつぎたい。将来平和をつなぐピースになるために今できることは女子ソフトテニス部の副キャプテンとしてコミュニケーションをとりつづけ信頼関係のあるチームを築きあげることだ。良いチームをつくるためには意見が食い違っても一つの意見だけで判断するのではなくいろいろな考えを聞くことが大切だ。まずは自分の身近な所から人と人をつなぐピースとして働き、その経験を将来に生かしていきたいと思う。一人一人の笑顔が輝く世界を目指して。

講　　評

審査員長
守山市教育委員会　教育長　辻本　長一

《1年生》

中学生になって三か月あまり経ちますが、いろいろと視野が広がり世の中のいろいろな事に自分の意見を持つという成長した姿から、この時期の子どもから大人へと成長するする姿が見られたと思います。
家族から学んだことや人間社会の矛盾に気づいてあるべき姿を考えたこと。あるいは災害をきっかけに大切にすべきことを考えたこと。こうしたことから皆さんが持つ豊かな感性を発揮して感じ発見したことは、中学生の純粋な思いで、かけがえのないものだと実感しました。

《2年生》

自分の疑問を解決するために考えたこと、家族の死から命について思いを巡らせたこと、自分が経験したことをもとに望ましいあり方について考えたことなど、自分の取り上げたテーマに対して自分自身で深く掘り下げて調べて考えている。そういう探求する姿勢を発揮した発表が多くあったと感じました。こうした取り組みは、これからの人生の中で、いろいろなことに挑戦する原動力になるはずなので、大切に育てていってほしいと思います。

《3年生》

これまでの経験から広く社会に目を向けて、そこで感じた疑問、矛盾、発見をきっかけに「私の思い」を発展させていました。自らの進路選択を間近に控えていることもあり、将来の生き方や実現したい社会の姿に言及する主張もあり、一人の若者として積極的に社会参画している姿に感銘を受けました。今回の主張をきっかけに、これからの生活の中で自分の思いがいきづき、大きな思いに成長していく皆さんの歩みに期待をしたいと思います。

《全体をとおして》

この意見発表は、中学生にとって貴重な機会だと思っております。今日、学校代表として意見発表をしてくれましたが、本当に素晴らしい意見発表だったと感じております。また、全ての学校において生徒たちが身近な生活、社会問題に目を向け、これからの自分と関連付けながらどのように解決していけばよいのか向き合う、よい機会になっています。全ての生徒がそのような意見を書き、取り組みをしていることは本当に素晴らしいと思います。また、意見発表を聞かせていただき、着眼点が素晴らしく、中学生らしい独特の発想で物事を捉え考えを深めている姿に感銘しました。

守山市は、青少年赤十字（JRC）発祥の地といわれ、その態度目標が「気づき、考え、実行する」です。まさしく、身近なこと、社会のこと、世界のこと、いろいろなことに目を向けて多様な視点で分析をして考え実行につなげる、そういう意見発表だったと感じました。

更に、こうあると良いなと思ったことを紹介します。

文章を書くとき、「序論、本論、結論」とか「起承転結」を意識して文書構成をすると良いでしょう。

皆さんの発表内容を事前に読み進めていって、いろいろな視点から物事を見つめ、いろんな文献を調べて自分なりに根拠を明確にして論を展開していて非常に序論、本論と進められ素晴らしいと思いましたが、最後、結論のところで少し物足りなさを感じました。

結論のところを、自分の生き方、今の自分を踏まえてこれからどうしていくのか、ということをもう少し具体的により深く考えて語られると、更に良い発表になると思います。

私も話をするのは苦手なのですが、これは意見発表です。審査基準が、内容は主旨がはっきりしている。論旨が一貫した主張になっているか。しっかりと説得できるような内容で自分の経験とか思いを語っているか。根拠を何か文献を調べて、それをもとに話しているかなどいろいろあります。

そして、発表態度、声量といったことが審査基準になっています。発表をしているとき、原稿を見ながら発表をする人が多いと感じました。全てを完璧に覚える必要はないと思いますが、もう少し自分のものにして、相手に伝わるようにしっかりと観客の方を見て、時には少し間をおいて話をするのも良いかと思います。

意見発表なので、こうしたことを更に意識されるとより良い意見発表になると思いますし、皆さんの思いがよりよく聞いてもらう方に伝わっていくと思います。

以上のようなことを意識して、今後、がんばってほしいと思います。

また、今回、語っていただいたことが自分の生活で実践できること、これが一番すばらしいことだと思いますので、そうしたことを考えてこれから生活をしていってほしいと思います。

第 27 回中学生広場「私の思い 2024」守山大会　アンケート結果

《意見発表について》

○「命の大切さ」について心に響きました。中学生の「思い」を聞いて、「確かやな、本当やな」と思いました。ハキハキと大きな声で聞こえやすかったです。「思い」を聞いて「これからの人生、大事にしよう」と感じました。

○命の大切さ、助け合い、何事も当たり前と思わず、一日一日を大切に生きていくよう考えさせられた。

○ 2 年生の発表は、家族のされている農業を生活の中に感じ、自分の将来やそれだけに止まらず、未来の夢にまで繋げているのは素晴らしいと思いました。
1 年生の発表は、自分の生活の中での生き方、自身という経験を通して素直に発表されたと思います。
3 年生の発表は、日本という国を通して世界を見る目、自分でどう将来を生きればよいか現実を見ながら考えられていて良かった。

○中学生の皆さんが日々の生活の実体験を通して、様々なことを感じておられることを知り心が動かされました。皆さんの発表から大人として考えさせられることが多くありました。共存だけでなく互いに意見を伝え合うことが、自身の見方、考え方の広がりに繋がるということが素晴らしいと思いました。

○大人でも感じる思いを子どもたちも言っていた。言えない中、みんなの前で発表していた姿が心に残りました。

○自分の考えを深く見つめ、追求していくことができていて素晴らしい。

○今の思春期に疑問に感じ、真摯に向き合うことは素晴らしいと思います。この先、仲間と繋がることや生活する中で達成、満足を得ることには挫折を味わうこともあろうかと、今日の気持ちを思い出し前向きに進んでほしいです。

○同じ中学生として、こんな思いを持っているんだ、と感心するとともに尊敬の気持ちでいっぱいです。見に来て良かったと思いました。

○自分の経験や社会をみて、考え、自分なりの答えを導き出された十代の皆さんの話に感動しました。

○身近なところで誹謗中傷を知り、それに負けない心を持って生きる大切さをいつまでも持ってがんばってほしい。言葉の使い方次第で、気持ちが変わる事の言葉の恐ろしさを常に持つことを感じた。

○若いからできる社会に対する不満や伝えたいことを、力強く発表されており、大人になると忘れてしまっている反抗心がとても素直に感じられました。

○自分を大切にする、他人を大切にする発表が多くあり良かった。知ること、学ぶことを続けていってほしいです。

○年齢的に友人がなくなってきている。その中で命の大切さ、日々の生活をどう過ごすかわからなくなってきている。中学生から意味のある発表でもう少し頑張りたい。好きなこと、やさしい妻がいるからこそ自分もまだ生きたい。

○それぞれが自分の「思い」を発表されていてすごく心に響きました。私には小学生の子どもがいますが、中学生になるとこんなにも自分の思いをはっきり言えるのかと驚きました。

○中学生が直感的にとらえる姿は物事が核心に迫っている姿なのではないかと思います。どの発表からも中学生の皆さんの素直な思いや優しさ、大好きな人や物を大切にしている気持ちが伝わってきました。今の思いをこれからも大切に素晴らしい未来を歩んで下さい。

○今、当たり前のように生きて毎日おいしいご飯が食べられることを当たり前だと思わず、毎日、感謝しながら生きていかなければならないと改めて感じることができました。

○純粋でパワーあふれるスピーチに感動しました。若い皆さんの新鮮な視点にも関心が持てたことで、大人も変わらなければいけないと思いました。

○生徒さんそれぞれの思いが、聞いている私たちにも心残る思いです。この思いをずっと持っていてほしいと思います。大人になっても忘れないでほしいと思います。

《活動発表について》

○自分たちで学校生活をより良いものにしようとしているのを感じ、頼もしく感じました。また、外部へのボランティア活動も素晴らしいです。

○勉強以外に社会に繋がる活動を頑張っている。

○生徒会の役割は学校内、学校外でとても大切だと思います。また、自分たちが幅広い経験をして自分の財産にもなりますのでこれからも頑張ってください。

○どちらの学校も生徒会を中心に社会活動に積極的に取り組んでおられ、多くの生徒にも気持ちが伝わり、活動が将来の役に立っていくと感じた。

○忙しい学生生活の中で、自分たちに何が出来るのか考えボランティア活動、人と人との繋がりを大切にしていることは、とても素晴らしい活動だと思いました。

○学校生活を楽しく充実したものにしていこうと考えて、活動されていることがよくわかる発表でした。

○生徒会の活動を生き生きとされていることが分かった。この経験が将来、大人になった時の貴重なものになると思った。

○中高生の今、思っていること考えていることに触れる良い時間でした。大人になると忘れてしまうことを思い出させてもらいました。その気持ちを忘れずに進んでいってください。

○地震や貧困などの募金や祭りや交通安全などの活動が行われていることを知り、人と人との繋がりの暖かさを感じられた。

○私も発表された中学校の生徒会に入っていたので、自分のときより充実し、より生徒会らしい働きをしていて素晴らしいと思った。これからも頑張ってください。あいさつ運動は、とても良いのでぜひ続けていってほしい。

○子どもたちが近い将来、学校に行くのが楽しみになるような活動をしてくださりありがとうございました。

《実行委員について》

○６中学校の生徒たちが、役割を決めて大きな大会である「中学生広場」をちゃんと成功させていたので大人、生徒たちの団結が素晴らしいと思いました。

○中学生の方の運営で、自分たちでしようという自主性があり大変良かったと思います。

○中学生も企画して運営されることは必ず将来のためになると思います。私もそうでした。この経験と共に取り組んだ仲間を大切にこれからも皆さんのご活躍を期待します。

○市内の中学生が協力して、運営に携わることは物事を主体的にとらえ、取り組む力を発揮できる良い機会です。皆さんが活躍する姿は素晴らしかったです。

○実行委員さんたちの計らいによってスムーズに事が進んでストレスなく楽しめました。

○皆さん、慣れていないことが多かっただろうに、上手に役割をされていて良かったです。違う学校の子たちとの交流、出来て楽しめましたか？良い経験になりましたね。

○いろいろ準備も含め大変だったと思います。でも、こうした経験が必ず人を成長させます。君たちの力になります。

○大きな会を運営する大変さと、やりがいを感じられたのではないでしょうか。皆さんの貴重な経験の場に立ち会えたことに喜びを感じています。

○来て良かったと思える大会でした。本日までの準備、今日の運営、誠にお疲れさまでした。より大会が続くよう、しっかり引継いでください。

《全体について》

○今の中学生の「生の声」を聴くことができる良い機会だと思った。みんなしっかり考え、しっかり主張されているところに感動しました。

○中学生と思えないほど、しっかりした考えを持っておられ素晴らしい。少し涙してしまった。

○とても良い機会のため、もっともっと多くの守山市民に参加いただき、直接、聞いてほしいですね。

○なかなか中学生の本音や想いを聴くことがなく、貴重なことだと思っています。今後も続けていってください。

○中学生が社会を冷静に、自分なりの視点で穿って見ていることに感動しました。それぞれの思いをさらに深く掘り下げ、自分の意見に誇りを持つと、他人の意見を受け入れる余裕が出来るので、考えることをやめず、考えを深めていってほしい。

○今の中学生の伝えたいこと、主張をたくさん聞いて一つ一つ考えさせられる内容でした

中学生広場実行委員

実行委員長	内谷　樹	（うちたに　いつき）	市立守山中学校	3年
副実行委員長	廣田　碧音	（ひろた　みおん）	明富中学校	3年
実行委員	太田　琳音	（おおた　りのん）	守山南中学校	2年
実行委員	唐松　紗也	（からまつ　さや）	守山南中学校	2年
実行委員	瀬尾　柊哉	（せお　しゅうや）	守山北中学校	2年
実行委員	池田　葵	（いけだ　あおい）	明富中学校	3年
実行委員	灰谷　歩実	（はいたに　ふみの）	県立守山中学校	1年
実行委員	小濱　志織	（おばま　しおり）	県立守山中学校	1年
実行委員	遠藤　咲乃	（えんどう　さきの）	県立守山中学校	2年
実行委員	西口　翔	（にしぐち　しょう）	県立守山中学校	2年
実行委員	近江　弘翔	（おおみ　ひろと）	立命館守山中学校	2年

中学生審査員

審査員長	髙谷　咲南	（たかや　さきな）	守山北中学校	3年
審査員	倉田　樹	（くらた　いつき）	守山南中学校	2年
審査員	牧野　遼大	（まきの　りょうた）	市立守山中学校	3年
審査員	生瀬　陽琉	（なませ　はる）	明富中学校	3年
審査員	栗田　琉煌	（くりた　るきあ）	県立守山中学校	2年
審査員	陳　成悦	（ちん　なりよし）	立命館守山中学校	2年

第 27 回中学生広場「私の思い 2024」守山大会　実行委員感想

実行委員をして《感　想》

○最初、話せる人がいなくて緊張していたが、仕事をするうえでコミュニケーションを取り合って仲良くなることができた。また、コミュニケーションを取り合うことでスムーズに進めることができた。

○普段やらないことが体験できてよかった。少し失敗したなと思うところもあったけど楽しかった。最後までやり遂げられてよかった。

○これから先、このような経験はすることが少ないと思うので、貴重な経験でした。とくに、自分は審査員だったのですが、人の事を採点することは難しかったです。しかし、それなりに達成感もありました。

○去年は意見発表者として参加しましたが、自分が作文を読んでいる裏で、こんなにもたくさんの人が動いて下さっているとは知りませんでした。他の中学校の方と話すことが出来たりして良い経験になりました。

○初めて実行委員として楽しかったし、様々な学校の人と関われてよかった。

○楽しく充実していました。最高の思い出です。実行委員として働くなかで、貴重な経験と他校の子との関わりがあって、すごく価値のある幸せな活動でした。また、私は審査員で発表をよく深めたり、また別の見方を考えたり、ここでしかできないことが出来ました。

○初めてする審査員は緊張していたが、周りの先生方が優しく緊張も直ぐに和らいだ。審査員の仕事は楽しく色々な中学生と話せる機会があり、すごく充実した日だった。

○初めての経験で緊張しましたが、周りの人たちがとても優しくて楽しく活動することが出来ました。一人でやっているというより、皆でやっているという意識が強く、とても心強かったし、また、したいなと思いました。

○実行委員として、裏側がどうなっているかを見ることが出来た。役割がたくさんあり大変だったが楽しかった。

○楽しかった。個々にするべきことが課せられ忙しかったけれど、他の学校の人と協力して無事に終わらせることが出来て嬉しかった。

○生徒会初めての仕事で緊張する場面が多くありましたが、色々な新しい経験ができて良かったです。また、実行委員全員で協力する場面が多く、とても良い機会になりました。貴重な経験をさせていただき、ありがとうございました。

○参加者のそれぞれの思いを聞くことができ、良い機会だったと思った。

○他では出来ないようなことだったので、とても良い経験になりました。来年も参加したいです。

来年度の実行委員の皆さんへ

○緊張しても落ち着いて頑張れ！

○楽しんでやってください。‼ 間違えても大丈夫！

○めんどくさいと思うかもしれませんが、それよりも終わってから得られるものが大きいです。頑張ってください。

〇疲れることもあるけれど、やりがいもあり楽しいので是非やってみてください。

〇Ｅｎｊｏｙ　your　self ！

ここでしかできない貴重な経験がいっぱいです。思っている以上に面白いですよ！

〇あまり緊張しなくて OK ！自分自身の仕事を中学生と一緒にがんばれ！

〇初めは緊張するかもしれないけど、終わると達成感でめっちゃ楽しいから、周りの人にどんどん声を掛けて楽しんでいこう！

〇もちろん大変なこともあるが、他の学校の人とも話せるので関係を広げて楽しい。

〇他の学校の人とも仲良くなれて、とても楽しかったです。大変かもしれませんが頑張ってください‼

〇最初は、不安ばかりありましたが、練習をしていくうちに楽しいと感じることが多くなりました。他校との繋がりを大切に、新しい事にたくさんチャレンジしてください。また、大会が成功したときの喜びや達成感を味わってほしいです。頑張ってください。

〇たくさんの思いの中から一つ選ぶことは難しいことだったけど、良い経験になると思うので、楽しみながら頑張ってください！

〇貴重な経験になると思うので楽しんでください。

【青少年育成市民会議のシンボルマーク】

近江守山ライオンズクラブ　　守山市青少年育成市民会議　　守山市 PTA 連絡協議会

第 27 回中学生広場

「私の思い 2024」

守山大会の記録

発行　令和６年 12 月

編集・発行

守山市青少年育成市民会議

第27回中学生広場「私の思い2024」守山大会
・主催　守山市青少年育成市民会議、近江守山ライオンズクラブ、守山市ＰＴＡ連絡協議会
・後援　守山市、守山市教育委員会　　協力　守山市小中学校教育研究会
LIONS
INTERNATIONAL

中学生実行委員